

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463645

研究課題名(和文) 月経周期に着目した育児期女性のQOL評価と子育てへの影響に関する縦断研究

研究課題名(英文) A longitudinal study of the influence of the symptoms from the menstrual cycle on QOL and the childcare of women who are raising a child.

研究代表者

都筑 千景 (TSUZUKI, CHIKAGE)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00364034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、育児期女性における月経周期に起因する症状の実態把握を行い、QOLや子育てにどのように影響を及ぼしているかを明らかにすることである。

近畿圏の自治体で質問紙調査を行った結果、月経前気分不快障害(PMDD)疑いのある女性は全体の5.6%であった。また、PMDD疑いありの女性には、就労有、第1子が3歳以上、夫が話を聞いてくれない、健康状態がよくない女性が有意に多かった。さらにPMDD疑いなしの女性に比べ、QOL、SOC、養育肯定感(SAPS)が低く、不適切な養育行動の頻度は有意に高かった。QOL高群では、PMDD疑いありの女性がQOL低群の約半分であった(オッズ比0.449)。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to investigate the symptoms from the menstrual cycle and to identify the influence of the symptoms on QOL and child rearing among women who are raising a child.

The results of the questionnaire survey in metropolitan area municipalities in Japan were that 5.6% of the women were suspected of having the premenstrual dysphoric disorder (PMDD). Women who had a job, who had a first child over 3 years old, whose husband doesn't listen to them, and who had a poor health status had significantly more likely to have suspicion of PMDD. Compared to women who have no suspicion of having PMDD, the women who had a suspicion of having PMDD had significantly lower scores of QOL, SOC, SAPS, and a higher occurrence of maltreatment with childcare. In the group with high QOL, the suspicion of having PMDD were about half of the group with low QOL (odds ratio 0.449).

研究分野：公衆衛生看護学分野

キーワード：子育て支援 子ども虐待予防 PMDD 母子保健 QOL 月経 精神的症状

1. 研究開始当初の背景

児童虐待予防は我が国の喫緊の課題であるが、母子保健領域においては児童虐待に至るまでの「発生予防」が重点施策として展開されている。虐待発生予防対策においては、母親の悩みや育児不安を早期に発見し、気になるレベルでの支援が課題としてあげられている。

近年、女性の心身の不調として注目されている状態に月経前症候群 (premenstrual syndrome:以下、PMSとする)がある。その頻度は報告により異なるが、何らかの症状があるものが60.8~87.2% (松本1956)、90%以上 (ダルトン2007)と報告されている。注目すべきは、PMSには抑うつや益怒性などの精神症状の頻度が高いことである。中でも、社会生活や仕事、対人関係を著しく妨げるなど治療が必要な、または治療を希望される程度の人では8% (相良ら1991)、欧米の報告でも2~5%存在するといわれている。また、川瀬 (2004) は成熟期女性におけるPMSの実態調査から、経産婦は未産婦よりもいらいらや攻撃的になる、家族への暴言などが有意に高いことを報告した。さらにPMSの女性は産後うつになりやすいことや、犯罪や虐待との関連性も示唆されている (ダルトン1978)。

しかし、日本ではまだまだ社会全般にPMSが認知されておらず (松本2004)、育児期の女性におけるPMSに関する研究は少ない。その中で島田ら (2009) は月経期における症状が顕著な女性は子どもへの対応能力が低下していると報告し、子育て支援において月経随伴症状の把握の必要性について指摘した。現状の虐待のリスクアセスメントツールやチェックリストなどに、月経周期やPMSに関する項目や視点は見当たらないが、子どもへの感情的な対応に月経周期や心身の不調が影響している可能性が考えられる。

また、現在、自治体において多くの子育て支援策が行われているが、大半が子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減を目的とした「育児者としての母親」への支援であり、「育児期にある女性」とみなした支援についてはほとんど検討されていない。育児期女性の月経周期に関する症状の実態を把握したうえで、養育行動やQOLへの影響を明らかにすることにより、育児期女性に対する健康と子育てを含めた親子支援策の検討が可能になると考える。

2. 研究の目的

本研究は、育児期女性における月経周期や月経随伴症状の実態を把握し、自身のQOLや子育てにどのように影響を及ぼしているか、またそれらの関係性を縦断的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

1. 実態調査

1) 研究対象者

調査設定期間に就学前の乳幼児の子を持つ育児期女性4,234人。

2) 調査方法

研究協力が得られた5か所の自治体に対し、乳幼児健診や子育て支援センターを通じて調査票を配布し、郵送により回収した。

3) 調査項目および評価尺度

- ・基本属性：母及び子の年齢、職業、家族構成、経済状況、地域の居住年数、夫の育児関与状況、母子の健康状態、ソーシャルキャピタル

- ・PMDD評価尺度 (宮岡ら2009)

- ・WHO/QOL26

- ・不適切な養育行動に関する項目16項目、行動不安に関する項目2項目

- ・SOC13項目 (山崎ら1999)

- ・養育肯定感尺度 (都筑2013)

- ・情緒的サポートネットワーク、手段的サポートネットワーク (宗像1983)

4) 調査期間 平成26年6月~27年7月

5) 分析方法

PMDDの実態については記述統計を行い、PMDD疑いの有無別にQOL、SOC、不適切な養育行動項目との関連についてt検定等を行った。また育児期女性とQOL/SOCの実態、夫の関わりや不適切な養育行動との関連を検討した。

PMDDとQOLとの関連を見るために、QOL高群/低群を従属変数とし、単変量解析で有意な関連が見られた項目を独立変数として強制投入したロジスティック回帰解析を行った。

2. 縦断調査

1) 研究対象者

1. 実態調査対象者のうち、A市に居住する第1子の育児期女性995人。

2) 調査方法

- ・4か月健診時の調査をベースラインとして、調査期間に出生した第1子の児を縦断調査対象者として抽出した。

- ・縦断調査対象児はA市にて連結可能匿名化した後、調査票を郵送により配布し、健診時もしくは郵送により回収した。

- ・2回目調査は、1回目調査の回答があった女性を対象とし、児が1歳6か月の時期にA市にて確認したうえで調査票にIDを付与して匿名化した後、郵送により配布し郵送により回収した。

3) 実態調査と同様

4) 調査期間 平成26年5月~27年7月

5) 分析方法

2回分の調査結果から、個人の縦断的な動向、QOLおよび不適切な養育行動の経時的変化を対応あるt検定にて比較した。

3. 倫理的配慮

実態調査では回答は無記名とし、調査票の回収をもって同意とした。縦断調査ではA市にて連携可能匿名化した後、研究用IDを付

した調査票により経時的に追跡した。

また、1回目調査時に2回目調査の同意が得られた人のみを2回目調査の対象とした。研究の実施に当たっては、神戸市看護大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

4. 研究成果

1. 実態調査

質問紙を4,235名に配布し、回収は1,284名(回収率30.3%)であった。女性の平均年齢は 33.4 ± 4.9 歳、修学年数は14.5年、就労有が17.7%、核家族世帯91.8%、子どもの平均人数は 1.7 ± 0.8 人であり、第1子の平均年齢は 3.0 ± 3.1 歳であった。女性の健康状態、子どもの健康状態については良いが91.6%、98.0%であった。全体でPMDDの疑いのある人は63人(5.6%)であった。

PMDD疑いあり群となし群の2群で比較したところ、PMDD疑いあり群には、就労有、第1子が3歳以上、夫が話を聞いてくれない、健康状態がよくないと答えた女性が有意に多かった。また、QOLのすべての領域、SOC総得点、養育肯定感得点において疑いなし群よりも有意に低く、不適切な養育項目については、行動に関する9項目と行動不安に関する2項目の得点が有意に高かった。

SOC総得点の平均は、 54.3 ± 6.5 (範囲34~76)点であった。不適切な養育行動に関する10項目、行動不安に関する項目2項目においてSOCと有意な関連がみられ、SOCの低い者は高い者に比べて頻度が高かった。

QOLの平均値は 3.36 ± 0.5 であった。QOLの平均値で高群/低群に分け群間比較を行ったところ、高群は低群と比較し、子どもの数が少ない、経済的な余裕がある、夫が育児に接する時間がある、夫が妻の話をよく聞いてくれる、居住地域に愛着がある、近所づきあいがある、母子ともに健康状態が良好という結果であった。子どもが寝る前に夫が帰宅する頻度の多さには有意差が見られなかった。また、不適切な養育項目の頻度については、不適切な養育行動に関する13項目、行動不安に関する2項目において、QOL高群が低群よりも有意に少なかった。

PMDDの有無とQOLとの関連についてロジスティック回帰分析を行った結果、QOL高群においては、PMDD疑いありの女性がQOL低群と比較して約半分という結果であった(オッズ比0.449)。その他、QOL高群の女性は母・子が健康、経済的余裕あり、地域への愛着あり、近所づきあいあり、情緒的サポート得点が高い女性が有意に多かった。

2. 縦断調査

継続調査の同意が得られた女性は211名であり、うち161名から返送があり(回収率76.3%)、これらすべてを有効回答であったため161名を分析対象とした。子どもが1歳6か月時点で、女性の平均年齢 32.8 ± 5.1 歳、子どもの数平均 1.07 ± 0.3 人、第1子平均月

齢 18.7 ± 0.85 歳、核家族94.3%、職業あり39.0%、産休・育休中15.1%、QOL平均値 3.17 ± 0.4 、SOC総得点 54.9 ± 6.2 であり、PMDD疑いの女性は9人(6.3%)であった。児が4か月時点と比較して1歳6か月時点では、女性は産休者が減り有職者が増加、その他にも近所づきあい、子育てサークルの参加者が有意に増加していた。対応あるt検定の結果、QOLについては全体2項目のみ有意に減少していた。不適切な養育項目については、行動に関する4項目、行動不安に関する2項目において、1歳6か月時点で頻度が有意に増加しており、特に変化量が大きかった項目は「子どもを大声で叱る」、「ほめるよりも叱るほうが多い」、「お尻や手を叩く」、「子どもが傷つくことを言う」であった。SOC、養育肯定感には有意な変化はなく、家庭内における手段的サポート、情緒的サポートはともに有意に減少していた。

3. 考察

PMDDの頻度は宮岡ら(2009)の調査結果5.9%とほぼ同じであった。また、PMDD疑いのある人はQOL、SOCが低く、不適切な養育行動の頻度および種類、行動への不安が高いという結果であった。QOL高群の女性におけるPMDDの頻度は低群の約1/2という結果であり、PMDDは育児期女性のQOLや子育て行動に大きな影響を与えている可能性が示唆された。よって、育児期女性の支援においては、月経周期に関する症状に着目していくことが必要と考えられる。

縦断調査結果からは、子どもの成長と共に母子の交流が広がり、不適切な養育に関する行動の頻度や種類が増えていることが明らかになった。子どもの成長と共に行動や活動範囲が拡大し、制止や言い聞かせなどが必要な場面が増えてくることが一因であると考えられるが、子育て困難に陥ることがないように、子どもとの関わりに負担を感じている女性を早期に発見し、早い段階で相談や支援ができる体制を検討していくことが必要である。今後は、幼児期後期までの育児期女性の経時的なQOLおよび多様な集団の子育て状況についての調査を行い、月経周期に着目した子育て支援に活用できるツール開発につなげていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計6件)

2015.10 第74回日本公衆衛生学会総会：
「育児期女性における月経前気分不快症状とQOLおよび子育てとの関連」

2016.7 The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing：
「Association between the quality of life and premenstrual dysphoric disorder among

women who are raising a child」

2016.8 第 19 回日本地域看護学会学術集会「育児期女性における Sense of Coherence(SOC) とその関連要因」

2016.10 第 75 回日本公衆衛生学会総会「育児期女性における QOL と夫の関わり、育児行動との関連」

2016.10 第 75 回日本公衆衛生学会総会「育児期女性における SOC と育児行動との関連」

2017.1. 第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会「育児期女性における月経前気分不快症状と Quality of Life(QOL) との関連」

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

都筑 千景 (TSUZUKI, Chikage)

神戸市看護大学看護学部教授

研究者番号：00364034

(2) 研究分担者

榎本 妙子 (MASUMOTO, Taeko)

同志社女子大学看護学部教授

研究者番号：50290218

(3) 研究分担者

波田 弥生 (HADA, Yayoi)

神戸市看護大学看護学部講師

研究者番号：00438251